

放射線 必須データ 32 被ばく影響の根拠

田中司朗 他, 著



タイトルにある「必須データ 32」とは、研究の成果物としてのデータが 32 個提示されていることを示している。これら 32 個のデータは、それぞれ 1 つのグラフあるいは表で示されている。つまり研究論文が一つの図表で要約されている。その一つ一つが本書では丁寧に解説されてい

る。グラフや表について、それを構成する一つ一つの項目が何であるかから説明されているのである。このように放射線の健康影響に関する重要な研究成果を一般の方が読んでも理解できるように詳細なガイドが付いているのが本書の最大の特徴である。本書は一般の方からの質問への回答を繰り返すことで作成されており、その成果が結実している。また、一般の方が疑問に思うと考えられたことが 23 編のコラムとしても掲載されており、疫学や統計学への理解を深めることができる。このように一般の方を意識して作られた書籍であるが、幅広い分野の放射線生物学と疫学の研究が解説されており、読み応えがあり、本誌の読者にも興味がそそられる内容となっている。

一般の方からの質問を考えることの有益さは皆さんもお感じのことだろう。それに正面から向き合おうとしている意欲的な著作である。このことは、放射線にまつわる諸問題の課題に著者らが貢献したいという強い思いに由来していると考えられる。この背景から、本書は、社会的な合意を目指すことも意識されている。このため知の地平線（どこまでわかっていて、どこからわかっていないのか）を皆で確認し、今後に向けてデータの共有も訴えている。

さて、本書は、あなたの地域での放射線にまつわる課題に関する議論をより建設なものとするに役立ちそうであろうか？これだけでは何かが足りないと感じるあなたは、自然科学的なデータを市民が理解するだけでは、課題の解決が困難であることに気づいておられるのではないだろうか。

そのことへのヒントも本書は提供しているように評者には感じられた。多分野からなる著者らが分担して記述していることも本書の特徴であるが、毎日新聞の記事（2016年3月4日）によると「京都大や大阪大などの30、40代中心の若い研究者14人が応じ、フリー編集者と中学の元理科教諭も加わった」とある。必ずしも著者の専門分野ではない課題に関して、科学の作法に則り誠実な解説が記されているのを読者は読むことができる。それぞれの著者の考え方の微妙な違いも読者は感じることができるだろう。このような態度がむしろ重要なのではないだろうか。

解説したデータには、評価が定まっていないものも含まれているとある。場合によっては今後記述の見直しが必要になる項目が出てくるかもしれない。その時には、ヒトの疫学研究でホルミシス効果が多数報告されている（p.59）や UNSCEAR 2008 報告書第2巻の付録Aの5項とは必ずしも一致しない局所集中型の内部被ばく記述（p.234）に関しても出典の提示など質を向上させて頂ければと思う。

このように本書はじっくりと学びたい方にはとても適したものだと思われる。その一方で放射線に限らずリスクに関する学習は負担を伴う。原子力災害後に放射線に関する学習用の図書が多数発行されているなかで、本書は、その科学的根拠の基礎となるところを丁寧に説明しようとしており、優れた特徴を持っている。それでも、ややこしいことを学ぶためには生活でのパワーを割く必要がある。学ぶことを求めるだけではすまない現実の中で私たちは生きている。

（山口一郎 国立保健医療科学院）

（ISBN978-4-422-41090-6, B5判 248頁, 定価本体 2,800円, 創元社, ☎03-3269-1051, 2016年）

日本アイソトープ協会図書 新刊のお知らせ

放射線を怖がらない看護職であるために **new** 看護と放射線—放射線を正しく理解する—

定価 1,800 円 + 税 会員割引価格 1,620 円 + 税

< B5判・138頁 2016年4月発行 >

ご購入は JRIA BOOK SHOP にて → <http://www.bookpark.ne.jp/jria>